「学生の海外体験学習とグローバル人材育成に関わる研究大会」 参加報告

国際関係学科　東　弘子

高等言語教育研究所からの派遣により,「学生の海外体験学習とグローバル人材育成に関わる研究大会～多様化する海外体験学習と質保証～」に参加した。研究大会では二日間にわたり, 基調講演, パネルディスカッション, ワークショップ, 学生による学習成果発表などがあり, 多種多様な海外学習体験の事例やプログラム運営に関する知見を得ることができた。

以下、本報告では研究大会の内容と, 本学における筆者の教育実践に照らした際の評価および教育活動の運営に関する課題について述べる[1]。

1. 研究大会概要

「学生の海外体験学習とグローバル人材育成に関わる研究大会～多様化する海外体験学習と質保証～」は, 文部科学省・日本学術振興会「グローバル人材育成推進事業タイプ B（特色型）」採択校である東洋大学の主催による研究大会[2]であり, 東洋大学（白山キャンパス）で開催された。プログラムは以下の通りである。

●2014 年 11 月 22 日(土) ,

Session1：全体会　10:00-11:50

挨拶および基調講演「多様化する海外学習機会とグローバル人材育成の質保証」

Session2：パネルディスカッション　13:00-14:10

「グローバル教育とEポートフォリオ～ポートフォリオを活用した学習成果分析の実例から～」

Session3：分科会(学生による学習成果発表会)　14:20-16:00

1. 「Role of Writing Centers at Japanese Universities」
2. 「海外インターンシップの新しい試み」
3. 「日本文化・日本語教育を通じた海外学習体験」
4. 「実践型海外学習とフィールドリサーチ」
5. 「高校生セッション：現地フィールド・スタディーの意味」
6. 「グローバル・リーダー教育と入学前研修」

Session4：ワークショップ　16:10-17:30

「グローバル人材と世代間交流～メンター・コーチ・ロールモデル～」

●2014 年 11 月 23 日(日)

Session5：全体会（JOELIN 主催）　10:00-12:00

「海外体験学習におけるプログラミング」

---

1 本派遣報告の内容の一部は「第 17 回言語教育研究会」（2015/2/17）においても発表している。

2 その他　共催：大学教育における「海外体験学習」研究会(JOEIN),「グローバル人材 5000 プロジェクト」運営委員会　　後援：特定非営利活動法人 JAFSA(国際教育交流協議会)

Session6：分科会(学生による学習成果発表会)　　13:00-14:20

7. 「海外体験学習をとおした学生の学びと帰国後の展開 Part 1」
8. 「海外体験学習におけるプログラミング」（Session5 の内容を受けて）
9. 「PBL(Project Based Learning)型教育・協働教育・専門家養成教育」
10. 「国連ユースボランティア」

Session7：分科会(学生による学習成果発表会)　14:30-15:50

11. 「海外体験学習をとおした学生の学びと帰国後の展開 Part 2」
12. 「現場主義と多様性」

Session8：全体会　16:00-16:30

総括

分科会の学習成果発表会には，愛知県立大学も含め大学 23 校と高校 2 校が参加した。研究大会は盛況で，各セッションにおいて活発に意見交換がなされており，大学や高校の教育関係者，大学生や高校生など 450 名ほどの参加があった[3]。

二日間にわたる研究大会では，海外での学生の学びの具体的事例や，その学びを大学組織がどのようにサポートし次のステップにつなげ，その成果を可視化する取り組みをしているのかなど多くの情報を得ることができた。まずは,参加したセッションの内容や議論を報告する。

2. 参加したセッションの内容紹介

Session1：全体会　基調講演

Session1は，異文化適応能力の評価，海外学習に関わるアセスメント[4]研究の第一人者である Dr.Darla K. Deardorff（デューク大学）による基調講演「多様化する海外学習機会とグローバル人材育成の質保証」がなされた。学習者の達成度の評価だけではなく，学習プログラムのあり方への評価の重要性・必要性について，Why そして How という問いかけをフロアに投げかけながら，実際のアセスメントに関する研究リサーチの結果を提示し，特に海外学習におけるアセスメントの課題について丁寧に説明された。海外学習について従来信じられてきた「神話（海外に行けば自動的に異文化適応能力が得られる，外国語を話す教員は自動的に異文化適応能力を持っている，唯一のベストな評価ツールがある，・・・など）」を否定し，学習者によって産出されたテストなどのスコアのみを評価するのではなく，学習コース全体を通して，学習者とスタッフが協働してクリエイティブなアセスメントをしていくことの重要性が述べられた。

Session2：パネルディスカッション

「グローバル教育と E ポートフォリオ～ポートフォリオを活用した学習成果分析の実例から～」

芦沢真五(東洋大学)のコーディネイトにより，グローバル教育において実践されている E ポ

---

[3] 東洋大学グローバル人材育成プログラム News&Information　http://www.toyo.ac.jp/site/rds-global/60669.html 参照（2015/01/26）。研究大会の詳細は，東洋大学の研究大会事務局より公開されている。報告書「学生の海外体験学習とグローバル人材育成にかかわる研究大会」 http://www.toyo.ac.jp/site/rds-global/60669.html

[4] 一般にはあまりなじみがないが，教育学において「教師が教室内で用いている評価など，学習者のパフォーマンス，達成を評価する様々な方法」（Gipps1999:356）という広義の「評価」に関して，「アセスメント」という用語があてられている。（佐藤・熊谷 2010:2）

ートフォリオの活用事例と課題について，3 大学から報告があった。

・東洋大学（荒巻俊也）：副専攻コースで導入している「国際交流ポイント制度」の紹介。3 割程度の学生が参加し自主的にポイントとなる活動を入力。留学や英語テストのスコアなどの記録により統計処理が可能となること，スタッフが情報共有できることが強み。

・立命館アジア太平洋大学（カッティング美紀）：米国のセントエドワーズ大学との協働教育プログラムGLUE（Global Collaborative University Education））プロジェクト（全体で6000名が参加）における活用事例報告。特に，事後のふり返りレポートへのフィードバックやピアラーニングの実践における効果の紹介。

・愛知県立大学（宮谷敦美）：グローバル人材育成プログラムにおける事例紹介。学習の動機付けや学習目標の意識化のための E ポートフォリオ利用の指導や，コミュニケーション機能による留学中の学生の指導などの事例の紹介と，学習成果の可視化への取り組み。

こうした事例紹介から，学習成果の把握(語学スコア、留学歴、ポイント数、授業の履修数)という Output 的評価はしやすいが，Outcome 的な成果（コミュニケーション力、異文化適応能力など）は長期的に獲得されるものであり，どのように評価できるか，また，学生の利用率や学学内理解，認知度などのアップの必要性が課題として出された。

Session 3：分科会

参加した「日本文化・日本語教育を通じた海外学習体験」の部では，3 大学の学生から報告があった。

・早稲田大学：SEND（Student Exchange Nippon Discovery）日本語教育海外プログラムの成果

・立命館アジア太平洋大学：タイでの教育インターンシップに参加して

・愛知県立大学：海外日本語教育実習での学び

いずれも2～3週間の短期間の海外学習期間ではあるが，事前と事後の学びや学生相互のコミュニケーションの中で実践を通して学んだ体験

が生き生きと報告されていた。

Session 4：ワークショップ

「グローバル人材 5000 プロジェクト」による海外留学キャリアインパクト調査にもとづき，留学経験者と若い世代との世代間交流を促し，日本のグローバル人材育成を支援する事業に関する報告があった。具体的には，一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト(GiFT)，アンザスインターナショナル社などによって提供されるオンライン・プラットフォーム「留学のすすめ.jp」[5]を通じて，海外留学経験を持つ現役社会人と若い世代をつなげることで，人材育成の連関をつくっていくプロジェクトである。東洋大学では，正規授業において「海外体験を持つ社会人へのインタビュー」という課題をこのサイトを通じて実施する活動を始めている。

ワークショップでは，フロアメンバーが全員参加し，海外在住経験者と非経験者がペアを組んで海外での学びや異文化体験を共有する活動も行われた。

Session 5：発表報告：海外体験学習におけるプログラミング

「海外スタディツアーにおけるプログラム作り」として，東洋大学の箕曲在弘の具体的な教育実践の事例が紹介された[6]。ラオス農村で実施している 9 日間のスタディツアーについて，カリ

---

[5]一般社団法人 持続可能な国際教育推進のための研究コンソーシアム「留学のすすめ.jp」 http://ryugaku-susume.jp/

[6] 東洋大学社会学部社会文化システム学科編(2014)に詳しい。

キュラムとしての目的や，事前事後の学習の仕掛け，実施プログラムの留意点など，詳細な発表があった。それに対して国際理解教育の専門家として藤原隆章(同志社女子大学)からのコメントがなされた。海外での体験学習を実施する大学間の情報共有をする会であるJOELN(Japan Overseas Experienctial Learning Network)の主催するセッションであった。

Session 6，7：分科会

参加した「PBL(Project Based Learning)型教育・協働教育・専門家養成教育」の部では 3 大学の学生より報告があった。いずれも，大学内の枠組みの学習プログラムにおいて，具体的なテーマに基づいて国内外問わず国際場面の中で継続的に活動する中で，自身の学びと成長を獲得していった様子が，それぞれの経験と成果をあわせ発表されていた。

・立命館アジア太平洋大学：GLUE プログラムー繋がる過去、今、未来
・国際教養大学：移民と地域社会のあり方について考えた UC バークレーとの PBL
・神戸大学大学院：私のキャリアデザインにおけるキャンパスアジア・プログラム
日本で経験するもう一つのグローバル社会

筆者は，後半のセッションの時間は「海外体験学習におけるプログラミング」に合流し，海外教育プログラムを実施しているスタッフ間での，さまざまな課題や情報共有をおこなった。実習型学習における評価指標の基準の事例の紹介が，Session5 のコメンテーター藤原隆章によって提示され，その活用方法についても議論した。

Session 8：全体会　総括

各分科会のセッションからのまとめが紹介された。海外体験学習をキャリア支援につなげていくためにも，多様なプログラムのあり方の中で，ボトムアップ的な自由な評価へ変化していくことが必要ではないかと議論がしめくくられた。

3．体験型学習におけるアセスメントの重要性とプログラミング

これらの発表や議論から，大会の副題にあるキーワード「質保証」のために必要なアセスメントのあり方に関する課題と，「グローバル人材」育成につながる学びに欠かせない学生のモチベーションとフォローの観点から，大会参加を通じて学んだことについてまとめておきたい。

筆者は，本学の授業「基礎演習I」や「日本語教育実習」などにおいて体験学習型の授業を他教員との協力で実施しており[7]，2015 年度からは新しいカリキュラムで「プロジェクト型演習」を担当する予定でもある。これら授業実践において同じ科目を担当する教員との間で授業活動の質の向上のために議論することはあったものの，総合的なアセスメントとして学生の学びに対する評価を学習者と協働しプログラム自体を変容させていくという考え方は全く目新しいものであった。基調講演者に対する質問者の発言の中で「学習契約」という概念を知った。学習者個別にカスタマイズされたコース設定にもとづき，学習者ごとの能力ベースで評価をすることが，学びを有意義にしていくというものである。学習者それぞれが持っている力に違いがあったとしても，アウトプットされた結果をもって評価してきている自らの常識を考え直す大きな機会にはなったが，実際にはその実践は容易ではないと感じている。

また，多くの体験型学習の実践がカリキュラム全体の中でどのような位置づけであるのか，カスタマイズされたプログラムをどの範囲の学生に提供できるのかといった点について，いくつか

7 東弘子・亀井伸孝(2013)参照（pp.245-258）

の事例対して質問し確認したところ，体験学習型のプロジェクトは，いくつかの演習のうちの選択肢の一つであるケースが多いようであった。基調講演では，全ての学生に対して異文化学習の機会を保証するトレンドが紹介されたが，多様な学生の現状を考えればモチベーションに合わせた「選択」も重要なポイントであろう。

こうした多様な事例の課題を共有する本報告が，本学における教育プログラムの質の向上に少しでも寄与できれば幸いである。

＜文献＞

東弘子・亀井伸孝(2013)「フィールドワークを活用したアカデミックスキルの教育：国際関係学科「基礎演習 I」におけるとりくみ」『愛知県立大学外国語学部紀要（地域研究・国際学編）』45

佐藤慎司・熊谷由理(2010)「アセスメントの歴史と最近の動向」『アセスメントと日本語教育－新しい評価の理論と実践』第1章，くろしお出版

東洋大学社会学部社会文化システム学科編(2014)『2013 年度社会文化体験演習活動報告書 第 3 分冊(キャリア分野) 現場を知る、キャリアを築く―国内外の体験学習を通して―』東洋大学社会学部社会文化システム学科

Gipps,C.(1999).Socio-cultural aspects of assessment.*Review of Research in Education,24*